

団長が姿を消して
しばらくが経過し…

団員の方々は団長の
手がかりを求めて
各方面に散っていきました

そんな中…
アウギユステで
不穏な噂を耳にしたのです…

団員達が消息を絶つ…

私もエニユオと共に
アウギユステへと
向かったのですが…

迂闊でした…

——このエニユオと
いう存在が

変わらず『邪悪』のまま
その牙を研いでいたと
いうことに——

「ふふふ…ようやく
この時が来ましたわ…」





「貴方のその体と盾を壊して」

「その奥にあるモノ全てを
蹂躪できるこの時がね!」

ぐわ、

ぐわ、

本気で抵抗したら
殺してしまう
かもしれない

でも…それ以上に
この状況はまずい…

団長が不在で
団が混乱している
この時を狙うとは…

おそらく
私を犯している
この者たちは
操られている…

まさかエニユオが
幽世の住人と
手を結んで
いたなんて…!!

「くっくくく…」

彼らの目的は一体…?

「これからこの魔晶石が
付いた槍を
貴方の子宮に打ち込みます」

「結晶が子宮に
到達すると
ゆっくりと
変化を始めるわ」

「大丈夫、痛く
ありませんから」

「子種の方も
かなり子宮の
中に入ったようだな」

ちゅん…

「ええ、予定通りだわ」

「ふふっ、ねえアテナ
貴方、これから
ママになれるのよ」

びん

「な…っ!!!」

星晶獣である私を
孕ませる!!
そんなことが本当に…?

ですが、それが
真実だとしたら…

「子宮の中にある
星晶獣としての
力を吸収しながらね…」

ん…

どんな仕掛けが
あるのか
わかりませんが

あの程度の魔晶なら
私のアイギスで
受け止めた瞬間
碎ける!

この一撃を弾いた瞬間…

何としても
阻止しなければ…!!

その時がー

勝負

アイギスを通して…

す…!?

何か

が…っ!?

「あはははうー
すーいー」

「噴水みたいですょ」



『でも思った通り
貴方の…盾でも
防げないようですね』

『この魔晶は魔力に
反応するそうです』

『あなたの子宮に
ある精液…
その魔力に』

『快樂の波動としてねっ!!』



だめっ
アイギスで防いでも…っ

子宮に…っ!!

感覚…の…っ!!

波が…っ!!

爆発するように
広がって…っ!!

『ふふふ…あははは!!』

『いいーとでもいい声ですっ!!』

『分かりますよ
貴方の強靭な
心と盾が一突きごとに
ヒビ割れていつてるのが!!』

こんなツツ!!

私の盾を…
こんな方法でえっ!!

『さあアテナツ!!』

『これで——』

感覚が…どんどん
大きくなって…っ!!

ああああ…っ!!
集中が…アイギスが
維持…でき…な…

アイギスが
維持できない——っ!!

『——ドドメです!!』



「ふふっ」

「おめでどう、アテナリ」

「これで貴方は新しい命を
孕めるようになりました」

「ああ…先ほどのような
悲鳴をこれから何度も
聞けると思うと」

「ああ…ソクソクして
イってしまっ
そうです…」

その牙が私の子宮に
振り下ろされたのを
感じ取れた…

薄れゆく意識の中
埋め込まれた
魔晶がゆっくりと
罅を開き